

# インディアナ日本語学校便り だいごう 第11号

令和6年6月22日事務所 317-255-1631 メール ijls@indiana-j-school.net

(HP) <http://www.indiana-j-school.net> 校長 森 勝義

## 2024年度 第2学期 始業式

### ～行事が目白押し～

校長 森 勝義

約1ヶ月の夏休みもあっという間に終了し、いよいよ今日から第2学期が始まりました。家族で旅行に出かけたり、日本へ一時帰国したり、現地校のサマーキャンプに参加したりと、それぞれ充実した夏休みを過ごしたと思います。

日本からの情報によると、外国人観光客のあまりの多さに圧倒されていると。日本に関心を持ち、日本の文化に触れる人が多いと思う反面、ここ数十年なかった程の円安の今、日本に来たい人は想像以上に多いのだらうと思います。

児童生徒の皆さん、夏休み期間中の経験をお友だち同士で話し合い、情報の共有ができると思います。さて、2学期は21日間の授業があります。様々な行事が目白押しです。

#### 行事予定

9月 7日	中学部中間テスト	11月 2日	避難訓練 (火災対応)
9月 21日	第41回運動会	11月 16日	高等部弁論大会
10月 5日	個人懇談会開始	11月 23日	中学部期末テスト
10月 12日	第1回漢字検定	12月 7日	幼稚部クリスマス会
10月 26日	授業参観日	12月 21日	2学期終業日

園児・児童生徒の皆さん、1学期の反省を生かし、今学期への意気込みや、新たに取り組んでみたいこと等を具体的な目標設定をして、文字に表わして、自身の勉強部屋に掲示してください。私の2学期の目標は「園児・児童生徒たちからたくさん笑われること」です。みなさんが楽しく明るく学校生活を送ってもらうために、なんでもやる気持ちです。

「ひとりはおみんなのために みんなはひとりのために」の精神で、そして相手を思いやる気持ち、優しい気持ち、笑顔で学校生活を送ってください。

●さくらラジオの取材を受けました。インディアナ日本語学校の歴史から、COVID後、学校で取り組んでいることなど、インタビュー企画で話をしました。放送の方はポッドキャストにて掲載されています。日本からも視聴できるようです。さくらラジオHPのアーカイブにも掲載されています。

インディアナ日本語学校

かわら版 USA インタビューSP 全米日系団体・コミュニティー紹介

<https://sakura-radio-e42b7d0b.simplecast.com/episodes/usasp-te2vzadn>

## 「空缶」を読んで

高校2年生 本多 未和

この夏、空缶という本を読みました。この本は、長崎県の母校に訪れた元生徒の五人組が、原爆が落とされ混乱していた当時の悲慘な思い出や、それとは反対に穏やかな日常の面白かった思い出を語り合っているお話です。

特に印象に残ったところが二つあります。一つ目は原爆の被爆者のことです。被爆によって背中や腕などにガラス片が刺さって入院してしまったり、原爆症の再発を恐れて外へ一歩も踏み出せない人がいたり、原爆や病気で死んでいった人たちの家族や友人などが追悼会で祈りを捧げている姿を想像すると、当時の人たちの苦しみや悲しみで胸が締め付けられました。二つ目は、きぬ子という五人が語り合っているときに登場する女の子のことです。

きぬ子には、学生の頃にいつも大切に持ち歩いていた空缶があり、その中には両親の骨が入っていました。もし私がきぬ子だったら、親を亡くした後に学校へ通う気力はないだろう。しかし、彼女は悲しみの中で空缶を大事に抱えて学校へ通っており、なんて強い人だろうと驚きました。そんな彼女の背中には三十年前のガラス片が残っていて、そんな状態で小学校の教師をしていたのです。どうか手術が成功して生徒たちとまた暖かい時間を過ごしてほしいと願いながら読みました。

私は小学四年生の時に家族で広島原爆ドームへ訪れ、平和記念資料館で様々な体験を目にしました。当時はあまりの悲慘さに途中で気分が悪くなったほどでした。改めてこの本を読んで、原爆の被害者やその家族の悲しみや苦しみは想像を絶するものだと思います。この悲しい事実を日本国内だけでなく、世界中のすべての人に知ってもらわなくてはいけないと思います。もう二度と原爆が落とされる事がないように強く願います。私たちは今の平和に感謝して、正しい歴史や戦争について学び続けて、この平和を守るために強く生きていかなければいけないと思います。



えん まん ぐ そく

# 円満具足

すべてが十分に満ち足りて、不足なく備わっていること。「円満」「具足」とも十分に備わっていること。満足した穏やかな心持ち。

## 悲しみ、苦しみは

## 人生の花だ。

坂口安吾

1906年〜1955年 小説家

人生を生き抜いたお年寄りの集まりでは、苦勞話が弾む。苦しみを乗り越えた充実感だけが輝いている。